



～シーズン1「SMクラブの受付」～

エピソード5：「快樂」と「逸脱」そして日常への関心

しすてむ♥□きよたけ

前回、無店舗型は現在出せないようなことを書いていましたが、「店舗型」の間違いです！

僕の弱点なのですが、何とな〜く過ごし、見直しをしない。しかも、基礎がなっていないので、かつ、見直しをするけど、おっちょこちょい。それらが、見直しをしていないかのような他者に映る。またやってしまった〜と思うけど、うん。これが私の最大だった！ゴメンナサイ！でも、こういう人も結構大事だと思わない？人に恵まれているな〜って思うことにつながっているんです〜。言い訳なんですけどね。

ちょっと、どこか一般的な感覚とズレているように思われることもあるようです。

これって実は、マガジンを書き始めて改めて意識したことです。そして、もう一度言います！このズレを大事にしたい。でも、ちょっとズレっぱなしも如何なものかと思っている次第です。

性風俗に関することを書くなら、それについてリサーチをしたり、書くための枠組

みを決める。ですが、そのあたりも甘い。ま〜こんなもんで、いいかな？と思ったりしてしまい、「専門性」の低さを問うたりもしています。言い換えると、このくらいでいいかな〜というのが「専門性」が欠けている。

だが、僕のポジションは、何の専門家でもない。かといって、そういう曖昧さの位置から体感することは往々にして需要だと思っています。でも、根拠なし！！ここの専門性を高めたらよろしいのかしら？

しかし、「SMクラブの受付」シーズンは、割と「やり過ごし」について書いていることに気づいている最中です。彼女たち、そして僕の「やり過ごし」これって、僕が何らかを通し、やり過ごしが難しい世の中になっていると思っているからなのでしょう。

もしかすると、何かに拘らないが故に、たまたま知ること、知らないが故の驚き、そこからの気づきが「専門性」に影響を与えているのではないか…（僕が言うと、言

い訳っぽいですけどね)、そんなことも、僕の頭の中には遮っている最中です。

僕が、SM クラブの受付に辿りついたことを振り返ると、気づかされていく、知ろうとする、それ自体があらゆる現場で大事なことなのかもしれません。でも、一定の分野を土台とすれば、そこから開かれていくこともあります。僕の周りはそうした人が多い。僕は前者のタイプだし、その特性を活かそうと奮闘していますが、後者になれず悔しくも思っています。そんな奴が綴っているとお目を通しいただけたら幸い！

さあそれでは行きましょう！！今回のエピソードは、ようやく「受付」らしくなってきた、しすてむきよたけを綴ります！嘘です！！

その予定でしたが、2008年に出版された、鹿島茂著の「SとM」を読んだ時の僕について綴ることにしました。ということで、受付らしくなってきた僕は次号に回します。

今回のラインアップは、「1. 文化と社会への関心」、「2. 禁断に値するセックス観念」、「3. 変容の機微」、「4. 異なる視点と解釈」、「5. 変態になることも意識したい」、「6. 場によって成される相互成長」、「7. M嬢ってスーパーS！？」、「8. SMと日本文化」、「9. エロは一樣ではない」、「10. 日常生活へ」と細切れだけど、区切りいい！です。

1. 文化と社会への関心

『SとM』を読んだ。率直な感想は、性的嗜好という意味のSMが、歴史や文化が切り離されるものではない印象だった。確か著者である鹿島は、SMの起源について、西洋についてはキリスト教や家畜文化をあげ、鞭を取り上げていた。苦痛を伴うことで神に出会うことも書かれていたと思う。

キリスト教の一部を抜粋すれば、解釈可能で「忍耐は品性を品性は知性を生む」とあるので、僕は、試練は神に会うまでの通過点の一つであると解釈をした。

一方日本は、キリスト教圏ではないため、上記意味合いからは、キリスト文化と同一の解釈がないようだ。共通の解釈信念ではないことも含まれていたと思う。

鹿島は、こうした文脈から、西洋圏と日本におけるSMが異なることを述べていた。日本は、身体的な屈辱と、のちの快樂よりも精神的、さらに言うと、「羞恥」にあると書かれていた気がする。

これらから僕は、SMは文化的行為を表現している、もしくは、再現している行為と位置付けられることが可能だと感じたのだった。人の欲望は、歴史的背景を持った現在、そして文化として当たり前前に認識している羞恥心が、現れていると言ってもいいのではないだろうか。SMから現代社会を映し出す行為のようにも感じたのだった。著書には、「SMは逸脱を楽しむもの」と記載されていたと思う。

2. 禁断に値するセックス観念

僕は、宗教、とりわけキリスト教を切り口とした章に見入っていた。著者が、文学研究者であるため、文学的な要素が多く書かれてあるからかもしれない。もしくは、読むことで僕は、日本が、共通の宗教基盤にないことへ、関心を引き寄せられていたのかもしれない。

ヨーロッパにおけるSMの始まりは、キリスト教を軸に考えるならば「逸脱」という行為として生まれたことが書かれていた。キリスト教文化におけるセックスは、繁殖と快楽と切り分けて考えている、と位置付けられていたような気がする。それらを示す言葉として、「禁欲」と示されていた。

僕は、禁ずることがあるがゆえに栄える、人のお遊び、著書の言葉を借りると「快楽」そして「逸脱」も生まれるのだろうかと思った。キリスト教文化は、人の欲望を禁じ、神に従うことで神の体験をすることとなるのだろう。言い換えれば、「快楽」という人の欲望そのものが、「逸脱」という位置付けとなる。

3. 組織変容の機微

読みながら、自身の体験が想起されていた。2000年に差し掛かるくらいの頃、あるプロテスタント系の教会に行き、そこで性に関する出来事に直面した。これまで通っていたクリスチャン家族が、来られなくなった出来事だった。

僕は、寛容に受け入れるような場所のイメージを教会に抱いていたのだが、そうで

はない印象を受けた。

この発端は、高校生である娘が妊娠をしたということだった。

当時高校生だった僕は、「そういう、状況であっても過ごせる場所があってもいいのではないのか?」、「迫害的な行為ではないか?」、「一方、何か組織として守るために、その家族を入れないという見方もできる。となると、それは世の中に様々な人がいるという本質を阻害してはいないだろうか」と思った。そんな話しを両親に話した（これについて、両親と対話はなされなかったと思うが、問題とされたら居られなくなるということについて彼らも問いを持っていたようだった）。

当時の僕は、物事が常に一定であることはなく、社会やそこに暮らす人が変われば、社会や組織は変わり続ける。それは一体、どんな契機により変わるのだろうか、そして、なぜ変わらないのだろうかと思っていたのだと思う。

僕が、高校生の時に経験をした教会での出来事は、教会は性に関心を持つという、人の欲求にフォーカスが当てられていたのだろう。そして、その欲とは、神が禁ずることとされ、「逸脱」として捉えられたのではないだろうか。

数年後、大学生になった僕は、当時出会った教会の人と再会をした。妊娠した彼女はどうなったのか、あの時なぜ受け入れることをしなかったのかと尋ねた。

彼女とばったり駅で再会したことがあり、3人のお母さんになっていたそうだった。それ

を聞いて、何かほっとした。高校生で妊娠をし、これまで所属していたコミュニティにいられなくなった。

この経験は、自身が悪いことをしたという体験に変わる可能性を秘めていたと思う。しかし、そうではなく、そこからまた子どもに恵まれ元気に母として過ごしている姿は、想像でしかないが、さまざまな人やコミュニティに支えられるような、彼女だったのだろうと思った。支えは一つだけではないということであろう。

組織では関わることはできないが、個人であれば関われる。もしかすると、こうした個々の出会いは、組織が変わる緒なのかもしれないと思った。

2016年の今、性に関して寛容な教会も増えてきているようだ。僕が知る教会は、数少ないいくつかだ。宗派によっても、性に対する受け入れ方は様々なのだと思う。教会も社会に影響を受け体制を変えつつあるように思う。キリスト教といえども、宗派も細分化されていることから考えられるだろう。また、新しい宗派を受け入れる、神というものが無い国、日本の特徴的な柔軟さなのかもしれない。

4. 異なる視点と解釈

著書を読みながら、自身の体験を思い出すと同時に、「SMクラブ」へ関心を持った。SMが「逸脱」である行為であるにもかかわらず、SMとして位置付けられ、行為を可能としている場と感じたからだった。

「快樂」と「逸脱」は、キリスト教文化

から、いや現代社会においても、社会的不適合な者であるとか、オーバーに言えば、精神な病と位置付けられる。

SMは、性的倒錯という言葉を用いた、異常な状態として示される行為と認識されることもある。SMのイメージで言うなら、鞭を使うプレイや圧迫、羞恥を伴うプレイであり、それを好むということは、異常な様相と解釈される。時にパラフェリア（性的倒錯）と言われ、精神医学では精神障害、パラフェリア障害群とされている。つまり、時代や文化によって、個人が持つ嗜好への判断基準は変わるのである。

SMクラブに来る人たちは、その場で疾患患者として扱われることがないので、疾患に関する水準はどこに行くか、居るかにもよる。欲望は、社会が創り、それを表出可能な場も人が創る。さらに、人はSとMという個人間の関係性を創り出す機会にもなるのだと思った。

それは、上司や部下といった上下関係においても同様になのかもしれない。実際、プレイでそのようなシチュエーションを展開されることもある。プレイといった現場があることで創出させる。現実にある関係性からプレイになるのだから、関係の設定があった方が、場に馴染みやすいのも人の特性なのかもしれない。逆に言えば、関係性がわからないと、人とかかわりにくい人たちも社会にはいるということにもなる。

しかし、そこには社会的課題も含まれていると思った。とりわけ、上下関係で言えば、パワハラやセクハラ問題とされている。

しかし、あえて欲して「SM クラブ」にやってくる人はいる。性的嗜好であるが、問題とされること、ある種不道徳さを欲する人がいるのだと思った。それは、あくまでもプレイであるから、許される行為、いわば、秩序がたもられている中で表出される行為なのだったのだ。

不道徳とされるSM嗜好の人は、「変態」と位置付けられる。SMクラブのHPにも「変態を受け入れる店」というようなことが、書いてあった。僕は、性癖に軸を置き考えてみた。ノーマルと言われる性的行為があるが故にアブノーマルがあるため、ノーマルでなければ「変態」。いわば、一般的ではない、とか、多くの人とは異なるという範囲は生まれないということでもあろう。

5. 変態になることも意識したい

自分が、どれだけノーマルかはわからないが、ノーマルであるならば、想像的なこともできず、クリエイターでもない、つまらない思考の持ち主なのではないだろうかと思った。言い換えれば、SMにいる人たちは、一般的なことをそれなりに熟知し、新しい展開をもたらせる思考を持っているのでは？と思ったのだ。また、いろいろなお客さんに接客をするキャストたちは、自分がどこに居るのか、相手がどのような状況で、今何を求めているのかを察し、呈示できる人たちであるようにも思った。

著書には、最初に言い始めたみうらじゅんさん（僕、この人のこと詳しく知らないけど憧れる人）の言葉が載っていた。Sは

「サービスのS」。

この意味は、著書に書いてあったことを詳細に覚えていないので、著書である鹿島さんにもみうらじゅんさんにも大変失礼なのだが、Sはマゾの理想を叶えるための相手になるので、自分の欲望だけを相手に押し付けるだけの者ではない。相手が欲しいと思う、その先を憶測し与えていく、提供者であるようだ。

もう少し視野を広げると「逸脱」という現実では叶えられることのないことを、Mが要求することでSが与えていき、SMが成立されていくと推測した。MがいるからSが成立するので、Sは勤勉にさせられるかのように感じた。その「逸脱」を可能とする場がSMの現場となる。この意味で、解釈をすると「SはサービスのS」だと思った。

だが、正直なところ、「サービスのS」がSMのSなのか？という問いが生まれた。

「SMクラブ」から考えると一概に断言することはできないのではないと思ったのだ。

場から見ると、そこにはM嬢もいるので、彼女たちもサービス提供者なのである。M嬢は満足を得るために受け身であるわけではない気がしたのだ。自分が望むS男がいつでも来るわけではないのだから。

客であるS男性は、自分の欲求を求め、店を利用し、嬢を選ぶ。全ての客がM嬢に満足してもらうことを望んでいるわけでもないだろう。M嬢が、客の欲求に反応できるかどうかサービスとなる。だから、SMのSはサービスのSと受け入れきれないよ

うな感情が残ったのだ。

6. 場によって成される相互成長

しかし、明確なのは、プレイというのは、相互了解なしでは行われない。それを示すのは、客もキャスト（SもMも）も嗜好を呈示し合うこと。これらにより、サービスが創られると想像するに至った。

時系列通りに綴りたいのだが、上述したことで思い出した現場話があったからここでちょい出ししたい。著書を手にした1年後くらいに、責任者であるルーブル・ガガがと話した内容だ。

「ハタチそこらの女王が、調子に乗ってる場合じゃないんだよ。M男はな、あいつらよりもSM歴が長いんだよ！生まれた時からM男だったらそうやと思わないか？」、「まー生まれた時からかは知らんけど、確かにそうや。M男がいるから、女王様になれるわけだし、その人たちの欲求に出会うから、技術も身につくわけで、教えてもらうことは多いだろうね。」、「そうでしょ。私の若い頃とか、もっと時間もお金も費やして勉強した。」、「まー。それぞれモチベーションは違うから、ちょっと待っとき。女の子らも試行錯誤してるんやろから。風俗全体の業界からしても客層も昔とはちゃうやろしね。ま、俺帰るわー」

7. M嬢ってスーパーS!?

僕は、サービスとは何かという、自身の根本的な関心が引き立てられた。SMクラ

ブがあるから理想が叶うわけではないと思ひ、「サービス」ありきでサービスがあるのではなく、相互作用により生まれるものだった。相互に了解し、誘発し合っていくもの。このことについて、著書では、「二元論」で語られるものではなく、交わることを通してSMは生まれるものだとだと書かれていた。

しかし、僕はモヤモヤした思いが残っていた。SMクラブにはM嬢もいるので、M嬢は「サービス」の何であるのかと問いを残したままだった。つまり、「サービスのS」だと断言できないと葛藤していたのだ。だが、サービスが何かという問いとM嬢に対して、明確に断言できるような言葉は出てこなかった。

8. SMと日本文化

著書の文章を残している記録が手元に残っていた。「日本人というのは、西洋人と違って、苦痛を介して神に出会うということではなくて、自由の拘束を介して共同幻想に至る」という文章だった。確か、日本には神がないから、何のための苦痛か憶測ができないため、拘束されることで自由を奪うことを自ら選ぶという話だったと思う。

そこで、僕は「緊縛」が浮かんだ。緊縛は日本の文化である。江戸時代、罪人を拘束するために手錠のようにして縄を使っていた。しかし、ガチガチに身動きが取れないようにするものではなかった。うっ血ないように、そして、逃げるといふ自由をさせないように縛るので、ギリギリの拘束

をしていたのだ。

余白がある自由の奪い方のように思った。さらに、誰が何を、どのようなシチュエーションであるのか、互いにその状況を、何と認識するかによって、SM であるのか、牢獄に入れられたのか、変わるのだろう。

9. エロは一様ではない

雅さんが話していた、男性が書いた本だから、本当のSM とは何か違うというニュアンスはわからなくはなかった。僕がこの本を読んで曖昧に残っている箇所でもある。「エロ」という言葉。

上述してきた内容から見ていくと、SM は「エロ」から始まったものではない。著書でも、「セックス」と「SM」はイコールではないと述べていたと思う。

いつも同じプレイが起きるわけがない。S がどうであるM がどうであるということは、興味深いのだが、現場ではそこは後付けなのかもしれない。「エロ客」も実際にいた。SM が何であるかは、相互に認識が変容する瞬間があるのではないだろうか。

一方視点を変えて、女性目線でのSM は、男性が思うものとは異なるのかもしれない。性風俗であるから、すでに「エロ」が伴われる。キャストたちは、エロとそうではない行為の両方の間にいるように感じたのだ。

10. 日常生活へ

M の願望を、すべて叶えるとなれば、M に操られるばかり。それでは、創造は起こ

らない。そこには、新しくある程度の決まりが生まれる。ゆえに、「快樂」や「逸脱」は、人が相互にクリエイトしているからこそ生まれるものでもあるように思う。一方、創造は、それなりに今自分が欲していることが、社会から派生しているとも考えられる。

僕の想像にしか過ぎないが、「快樂」や「逸脱」について、執拗に意識せずとも過ごしている日常生活もあるということなのだろう。

誰からも連絡きませんが、絶賛解禁中！

**[『清武システムズ限定コース解禁!!!』](#)
[〜トーク about 熟女コース〜](#)』**

綴り人/しすてむ・きよたけ

動いて、頼って、甘えるファシリテーター。

[清武システムズ](#)という看板を引っさげ、活動中。

しすてむ・きよたけは、アイデアや意見ではなく具体的な変化のための装置です。「何か変化を求めているが、手立てがわからない。」そんな時にぜひ導入を！

【連絡先】

info@kiyotakesystems.net

ツイキャスでラジオ始めました。その名も「カッテに喋ら Night!」。カッテに喋りたい人、カッテに聞いて過ごしたい人募集中。

Twitter アカウント@SystemKiyoko です。

今のところ不定期ながらに、水曜日の 22:00〜行っています。清武システムズHP に録音のリンクを貼る予定です。